

# 19世紀フランスにおいてアルファンにより提案された近代庭園の特徴について

佐々木 邦 博\*

The Characteristics of Modern Gardens as Proposed by Alphand in France  
in the Middle of the 19th Century

Kunihiro SASAKI

摘要：19世紀中葉にパリ都市改造が実行されたが、その一部として緑地計画が組み込まれている。この公共緑地の形成は既存の造園界に变革を迫るものであった。また同時に、この計画の責任者であるアルファンは新しい個人庭園、すなわち近代庭園を主張する。そこでその内容を分析し、庭園における近代性とは何だったのか、その特徴を考察した。その結果、主な特徴として次の4点が明らかになった。まず整形形式庭園と非整形形式庭園を土地の広さにより選択すべきだとする両形式を同等に捉える姿勢、次に自然らしさへの志向、そして利用を重視した庭園構成、最後に構成手法の体系化がある。これらがこの時代に提案された近代庭園の性格を物語っているのである。

## 1. はじめに

19世紀中葉になされたパリ大改造、そこで主役の一翼を担ったのは体系的に配置される新しい緑地の建設であった。「パリのプロムナードゥ」とも呼ばれたそれらの緑地は改造後の新しいパリを語るにあたって欠かすことのできない顔になる。そしてこの大改造は単に都市を変貌させるとどまらず、都市の生活、文化に大きな影響をもたらした。まさに時代を画する出来事であった。<sup>1)</sup>

これらの緑地は当時のパリにとって非常に斬新な空間であった。最初に建設されたブローニュの森以来、その魅力は人々を引きつけ、多大な人気を博する。緑地建設の責任者としてこの計画を担当したアルファン(Jean-Charles-Adolphe Alphand, 1817-91)は著書「プロムナードゥ・ドゥ・パリ」<sup>2)</sup>の長い序文の中でこれらの緑地を造園史上に位置づけている。すなわち、古代から発展してきた造園の最も進んだ形態であり、芸術の一部分であるとの認識を披露する。<sup>3)</sup>人々は緑地の持つ価値の重要性に改めて目を向けたのである。

この影響は公共緑地にとどまるものではなく、庭園にも及んでいる。アルファンは前書の序文の第11節から第13節において新しい庭園造りをも提唱している。そして造園のデザインなど内容の評価に踏み込んだ記述はこの部分にしか見られない。そこでこの論文はアルファンが提示した近代的な造園の特徴とその理念を明らかにする事を目的とする。

その方法だが、この庭園造りを分析し、アルファンが以前の庭園において否定的評価や肯定的評価を下した点

を踏まえ、彼の主張する庭園の新しさ、その中に現れている近代性を探っていく。ところでアルファンは造園の歴史を概観する時に二つの軸があるとしている。それは整形形式庭園と非整形形式庭園の様式であり、庭園造りの際にはそのいずれかを選択しなければならないとして、別個に説明している。ゆえにまず整形形式庭園について、次に非整形形式庭園について分析と考察を進めていく。

## 2. 整形形式庭園

### (1) 整形形式庭園の捉え方

アルファンは整形形式庭園の流れを造園史における主要な軸としている。そしてルネサンス期のイタリア庭園とフランス式庭園を近代最初の芸術的庭園とし、<sup>4)</sup>特に後者をこのタイプの庭園にとり最も進んだ形態とみなしている。

彼は17世紀にアンドレ・ル・ノートル(André Le Nostre, 1613-1700)により築かれたこの様式のすばらしさを各所で述べているのだが、整理すると次の点からなる。第一に計画の構想の壮大さである。次は、庭園の各部分が巧みに組み合うように構成され、変化に富んだ美しさが生じることである。第三点は周囲の眺めから庭園を切り離しながらも、建物の前に広がる開けた空間と地平線を見せる見通し線により、外に開かれているように見える庭園を形成したことである。次の点だが、建築と庭園との間にバランスがとれていることである。最後の点は、土地の起伏を活かしてより良い庭園の構想を引き出そうと努めた点である。アルファンは主に以上の

\*信州大学農学部

5点をあげているのである。

さて欠点として取り上げられていることだが、主要な点は花壇と樹木の刈り込みの2点である。花壇については、図案の不必要な複雑さと硬さ、花や中低木が持つ豊かさの欠如、多すぎる内部の園路などを欠点として上げている。また樹木の刈り込みについては気品のないものとし、この偏愛がフランス式庭園を最も損なうものであると主張しているのである。

## (2) 時代に即した整形形式庭園の提案

アルファンは以上のように整形形式庭園の代表とするフランス式庭園の長所と短所を見るのだが、次に彼が提案する整形形式庭園を造るにあたって留意した点、強調した点の分析を進めていく。

アルファンの整形形式庭園造りに対する提案をまとめると、それは次の4点を中心となる。まず第一の点は土地の起伏と全体の構成である。庭園をパターン化し、それを大地に当てはめる方法を批判し、逆に大地の起伏から最も良い構成を考え出さなければならないとする。場所に適した構成をとる場合に最初に留意しなければならない点は住居を建設する場所の選択である。その条件は住居の前に眺めが広がること、住居から周囲が見おろせること、住居の周囲に十分に広い空間が確保できることである。また全体の構成に関してだが、ここでアルファンは「規則」(règle)を主張する。起伏に応じた庭園造りを行なう際に良い構成をとるための指針を集約し、体系化する試みである。具体的に述べると、全体の構成にとって最も重要視されるのは見通し線及びその周辺に配置される花壇や芝地などだが、それらの大きさを検討するに当たって考慮すべき点、なすべき方法を一般化し、普遍的に表現する。それは人間の視覚をもとに、ある地点から見える構図を考慮して、建物の前の花壇の広さ、並木道の幅、テラスの高さなどの釣合を計るものである。またそのためには視点場の設定が重要になるので、図面の上で考えるのではなく、その実際の場所で検討されなければならないと指摘するのである。この「規則」化と現地での視覚を重視する方針が彼の主張の特色をなしている。

第二の点は植物に関することだが、まず必要不可欠と思われていた刈り込みを批判する。刈り込みは樹木が醜い形をとらないための一種の身繕いにすぎないとその発想を転換する。そこに見られる理念は、植物の美は自然の形態にあるとする考えであり、それこそが目を心地よく休めさせることができるという考えである。そしてこのようにして力強く育った樹木こそが並木や樹林を傑出させ、美しいフランス式庭園を形成するとの認識を示すのである。さて樹林についてだが、著者はこれまでの外観を単調であり冷たいと捉えて否定し、かわりに開放的でしかも生氣にあふれた様子が見る人に伝わり、それが

全体に行き渡った樹林を提起している。最後に花壇に花を満たすことが上げられる。従来の花壇は複雑な模様を作ることに主眼があり、草花が植え込まれる面積は少なかった。アルファンは逆に花で満ちた花壇を提唱し、明るく華やかな雰囲気庭園に与えようとするのである。

第三の点は細部の組合せにある。アルファンは散歩しやすいように斜路や階段が作られねばならず、その行程においても新しく美しい風景が眺望されねばならないとする。以前の形態は美や荘厳さを中心に考えられてきたのに対し、散歩のしやすさ、その魅力の増大など、実用的な面にも重心を置くのである。

最後の点はパルクである。住居に近い区域はジャルダンと呼ばれ、より離れた樹林の区域はパルクと称されている。パルクにおいて成されてきた均整な図案、すなわち格子状や放射状の園路からなる図案はあまりに単調であり、散策する人に方向を見失わせる多くの道を作り出すとアルファンは批判する。そこでパルクにイギリス風景式庭園のような構成を取り入れることを提案し、相反する二つの様式が隣接する問題は、二つの様式が同時に見えさえしなければ事足りるとするのである。

## (3) アルファンが提案する庭園の特徴

以上のことからアルファンの整形形式庭園に対する提案の特徴を考察していくと、最初に「規則」化が上げられる。アルファンはフランス式庭園の型をあてはめる造り方を否定し、その地形にふさわしい構成をとる造り方を主張している。その方策として、彼は庭園構成の根本となる指針を体系化し、「規則」として表わす。この結果、この様式が持つ優れた構成原理が体系化され、それがいろいろな場所へ応用するのがたやすくなるのである。

次に、第二の特徴は自然の美の導入にある。アルファンは自然を見直し、その形態、特に自然樹形に美を知覚する。そしてこの形を人為的に歪めることを醜悪と主張する。彼はこの考えをフランス式庭園の内部においても積極的に取り入れている。古典的なフランス式庭園には従来見られなかった傾向であり、その理念が変化していることが窺えるのである。

第三の特徴は庭園構成、あるいは作る目的にある。従来最も力を入れてきた美しさ、荘厳さへの比重は相対的に弱まり、そのかわりに歩く心地よさという実用的な用途に重点がおかれる。つまり、使い心地の良い構成が求められているのである。

第四の特徴は「中間領域」の設定にある。住居付近の整形形式庭園と外部の自然との間に「中間領域」とも言える区域を作り出し、そこに疑似的な自然形態を取るイギリス風景式庭園を取り入れる。このことは整形形式庭園の理念の変化を物語っているのである。

## (4) 整形形式庭園の理念

次に彼の整形形式庭園に対する理念だが、まず古典的な

フランス式庭園の理念から考えていこう。広大な庭園全体が左右対称の幾何学的な全体構成を取るのだが、その大きさは現実を超越した世界を構築している。庭園の外観だが、樹木を幾何学的に刈り込むことによりあらゆるものが秩序化され、整然と並べられている。これに対してアルファンの提案する整形形式庭園はこの不条理なまでの整形性を戒め、樹木には自然樹形の美を求め、そして花壇を花であふれさせ、樹林は開放的に明るくする。そして周囲にはイギリス風の庭園様式を導入するというものである。しかもアルファン自身が自分の考えをまだまだ改良の途中である一段階にすぎないとみなしている。しかしそこにいくつかの方向性をはっきりと指摘することができる。それは以前の厳格さを捨て去り、明るく華やかな雰囲気を持つ、開放的な庭園造りである。それは庭園の美的な側面、及び構成の観念的な側面よりも、散歩の楽しみというより実用的な側面、行為という身体的な側面を重んじる傾向もその理由の一つであるが、また同時に美の感覚そのものが変化してきたことが反映されているようにも思われる。観る美から味わう美への変化である。庭園の持つ魅力、人々の嗜好の変化が庭園の根底にある理念を変化させ、庭園を以前とは異なった様態にさせているのである。この結果、自然らしさを尊重した明るい整形形式庭園、しかもイギリス式庭園をも取り入れた庭園の提案へと向かうのである。

#### (5) 庭園及びその理念の近代的な性格

それではアルファンの提案するこのような整形形式庭園、及びその理念が持つ近代性はどの点にあるのだろうか。まず「規則」の点だが、整形形式庭園の優れた構成を一般化し、普遍的に捉えようとする考えは、当時の科学主義(scientisme)の思潮と見合うものである。すなわち、事物の本質をなす規則や法則を探求して明らかにする思潮を造園の分野においても受け入れている。この思潮は長期間にわたって近代科学を育んだのであり、アルファンの考えはこの意味と対応して近代的だったのである。

次に自然の美、特に樹形の点だが、人為的に、あるいは維持管理が至らなかった結果として、フランス式庭園内の樹木を伸び放題にした庭園は18世紀から存在していた。しかもその形態が好まれていたのである。そしてこの点はフランスにおける風景式庭園への志向の産物とされている。<sup>5)</sup> アルファンの提案の特徴は、自然樹形、樹木が持つ勢いをより積極的に取り入れ、活かそうとするものであり、刈り込みに対する否定的な考えもまた同様のことである。比較するなら18世紀の傾向は整形形式庭園の消極的な放棄とも言えるのに対し、彼の提案は整形形式庭園の再生なのであり、自然の好みを取り入れた新しい形の創造の提示だったのである。

第三は庭園構成とその目的だが、これは時代の変化、庭園を造る社会階層の変化と密接に関係している。かつ

て大庭園を造った王侯貴族は姿を潜め、新たに商工業を基盤として台頭したブルジョワジーが庭園を造る主体となる。彼らの庭園の利用目的がその構成の変化に反映されているのであり、その結果として人間の身体を規準として庭園が捉え直されたということが出来る。彼が主張した庭園はこの意味で近代という時代に即した庭園なのである。

以上の三つの面がアルファンの主張に含まれる近代的な点として取り上げることができる。なお、中間領域の設定は18世紀にレプトンが主張した中間領域、すなわち風景式庭園と館との間に設置する整形的な庭園部分を中間領域とする関係を整形形式庭園とその外部に広がる自然との関係に置き換えたものと言え、近代との独自の関連は見いだしがたい。

### 3. 非整形形式庭園

非整形形式庭園とはイギリスから始まる風景式庭園を指している。18世紀に生まれたこの様式はアルファンが19世紀に公園を建設するにあたっていわば母体となった様式でもある。彼はこの庭園と彼が提唱する時代に合致した庭園を一連の流れの中で押さえている。まずこの点に関する彼の考えを見ていこう。

#### (1) 18世紀の風景式庭園の捉え方

18世紀におこった風景式庭園の創造は、それ以前の整形形式庭園の流れとは全く断絶した出来事であった。アルファンはそれがあらゆる点で過去の伝統と対立する考えにより着想されていると評する。すなわち庭園から整形的な形が払拭され、自然が主要な役割を果たしているのである。新しい庭園の長所として、第一に以前の庭園には見られなかった自然風景の斬新な魅力が上げられ、しかもそれを気候と関連させながら注目している点がまた特徴的である。著者によると「植物の豊富さよりも光の戯れが生み出すコントラストにより風景がすばらしいものとなっている」<sup>6)</sup>のである。第二の点は植物に関する知識の獲得に役立ったことである。植物はこの庭園内において自然の中であるべき場所に戻らねばならず、この結果その地方の植物が完全に分類されたばかりでなく、各植物の性質、特徴が研究され始めたのである。

さて著者により上げられている欠点だが、二点ある。第一点は自然の模倣が不十分なことである。自然の美しさの効果を追求しながらも、十分に細かく自然を観察してはいないとし、その結果あてずっぽうにデザインされ、植栽されたとしている。次の点は自然を模倣した庭園に詩的な意味付けを行なっていることである。庭園内に異国風の小建築物、また廃虚まで作るという装飾方法を乱用し、神秘的雰囲気や奇妙な外観を風景に与えた。それに伴い庭園は歴史上のあるいは小説の上での場面や田園詩を物語る舞台に変質する。人々はその場にドラマの人物

の影を見るのであり、風景は伝説と交じりあう範囲内で美しいと感じられるのである。この二点をまとめると、整形的な形は庭園から払拭されたが、そこに単純に美しい自然風景が置き換わったわけではないことがわかる。そして著者が引用した言葉を借りるなら、庭園は「伝統的思考(整形形式庭園)及び環境と無関係に、庭を作る人の空想に従って配置された一種の装飾」<sup>7)</sup>なのであり、その結果自然の美は不十分にしか追求されていないのである。

## (2) 時代に即した非整形形式庭園の提案

次にアルファンが提案する非整形形式庭園だが、それは以前の欠点をなくし、本来の自然の美しさを主役に据えた絵画のような庭園である。つまり、「環境は主題を提供し、芸術家はただ修正と展開を加えるにすぎない」<sup>8)</sup>と主張される。また一方で庭園は芸術作品であり、植物などは全く人間的な秩序の下に配置され、目の楽しみのためだけにアレンジされなければならないとする。この一見矛盾する二つの方向のバランスは次のようにしてとられることになる。すなわち、その地方色を基調として、芸術の要求が指示する場合に本当の自然から離れ、より快適な配置を画くことである。そして避けるべきことは素朴な自然、子供のような凝りすぎ、気まぐれ、田舎っぽさと述べている。

このような非整形形式庭園の造り方だが、起伏、植栽、園路の順に記されているので、この順序に従ってアルファンの提案をまとめていく。起伏には留意すべき点が二つある。第一に大地の起伏に優雅さを刻み込む追求である。庭園を散歩するとき目にする風景はあらゆる方向に対して多様でなければならず、散歩するに従い移り変わらねばならない。「これが近代庭園の魅力をなす光景の豊かさと優雅な構成である」<sup>9)</sup>と著者は述べている。美しさを構成する条件として視界の広がりとともに事物の心地よい配置が上げられる。視界や地平線が遮られる場合には谷や丘の縁を改変するのである。第二の点は地形に依拠した庭園造りである。計画を立てる際に、要所要所に棒を立て、実際にその場で計画案の効果を確かめることとそれにスケッチを補助的な手段として活用することがあげられている。このように計画する土地を実際に十分検討する姿勢が強く窺えるのである。

次に植栽に関してだが、その基本はまず樹木を自然の中であるべき場所に植栽することにある。自然には神秘的な調和があるので植栽する樹木の配置を可能な限り自然の状態に近付けるべきとする。全体の配置に関しては、植栽は庭園の広がりを目で見渡せないように配置され、眺望に活気をつけ、変化と輝きを与えるものとしている。こうした中で主要な特徴は4点ある。まず樹木に関してだが、樹高、樹形、葉量、葉の色を考慮し、緑の色調の中に目に心地よい対立を作り出すことである。さらに季節変化、日中の光と影のコントラストによる効果も予想

しなければならないとする。次は花の利用である。花は絵画的な庭園の主要な装飾であり、魅惑的な装いを与えるとする。主にコルベユ、<sup>10)</sup> コルレット<sup>11)</sup>として用いられる。3番目の点はジャルダンにある。この様式の庭園は外部にある畑からパーク、パークからジャルダンへとわずかな変化を伴って移行するのだが、ジャルダンにおいては植物が特に凝って育てられるべきだとする。その内容は花をこの場に取り入れ、そして芝地に外国産の珍しい目だった樹木を孤立させて植えることである。その結果、ジャルダンは一種の植物園ようになるのである。4番目の点は庭園に設置される小建築物と彫刻である。著者は18世紀のイギリス風景式庭園に対してこれらを批判したが、適切に設置され、実用的な用途に沿っている場合には、庭園に気高さや威厳を与えてくれると主張する。庭園は芸術作品であり、そこには小建築物と彫刻のためにふさわしい場所があると言うのである。

最後に園路に関してだが、アルファンは園路を眺望の中では完全に見えなくされるべきものとして捉えている。また、園路は最もたやすく、最も快適な方向に従ってある地点から他の地点に歩ませるものであり、理由のない方向転換は「論理の欠点」と見なしている。

## (3) アルファンが提案する庭園の特徴

さて次にこのタイプの庭園造りに関して考察を進め、その特徴を整理すると、主に4点にまとめることができる。

第一点は庭園と庭園が位置する環境との関係である。この点において庭園のもつ意味が変化している様子がはっきりとわかる。作為と自然風景の美の関係が変化し、前者を中心とする関係から後者を基盤とした上での両者の協調という関係へと変わっているのである。また庭園とその周囲との連続性、つまり分け隔てるのはわずかな変化でしかないことも強調されている。以上のことから風景の美が重視され、しかも庭園の美はその地方の風景の美をさらに洗練したものだとして認識していたことがわかるのである。

第二の点は判断基準としての視覚にある。アルファンは庭園を作る際にその現地での視覚を重視する。その視点は当然人間の目であって、実際には見ることができない鳥瞰図などではない。このように造る場合の規準の一つとして人間の視点と視覚を重んじる。また、この庭園の特徴と密接に関係するのだが、自然風景の美しさを庭園に求める時にその良否を判断する規準となるのは人間の五感の中でも視覚でしかない。庭園は形と色彩のメロディーだと言い、目の快楽を求める。その効果を得ることが主要な目的と化し、庭園の持つ特質を形成しているのである。以上のように視覚を重視しているのは視覚自体が庭園構成を決定する重要な要因の一つであるからだということがわかるのである。

次の点はジャルダンの独特さにある。庭園の中でもとりわけ住居に近い区域であるジャルダンも前述したように他の区域とは異なって取り扱われている。花や外国産樹木の集合体は、当然のことながら他の区域とは異質な様相を呈する。むしろ自然の風景ではない。美しく装飾され、華やかな一種独特の空間を演出するのである。

最後の点は庭園内の小建築物のあり方である。すなわち必要性により正当化された建築物のみが風景の中で魅力を発揮することができる考えたのである。この主張は実用性を第一の条件としており、多少装飾が付け加えられたとしても実用的な美が基調となる。またこの小建築物の利用は庭園が芸術作品であるとの考えとも関連する。それは庭園に植物とは異なる気高さと威厳を刻み込むとされている。庭園内の小建築物のあり方はこのように変化したのであり、それは庭園の理念の変化に対応しているのである。

#### (4) 非整形形式庭園の理念

アルファンはイギリス風景式庭園から彼が19世紀にふさわしいとする非整形形式庭園までを一連の流れとして把握していたのだが、それではアルファンは庭園を自然そのものとどのように異なるものとして把握していたのだろうか。基本的な傾向を考察していくと彼の庭園観は次のように考えられる。まず庭園は芸術作品であり、徹頭徹尾人為的な空間である。自然を取り入れるが、それは素朴な自然をモデルにしてはならない。ただ目の楽しみだけに生み出される形と色彩の一種のメロディーが庭園なのであり、ゆえに全く人間的な秩序の下にすべてが配置されなければならないというのである。つまりアルファンは自然風景をより美しく、目に心地よい状態にすることにより自然そのものを越えた風景美を持つ庭園を考えていたのである。これがアルファンのこの庭園に対する考えである。人工的に構成された理想的な自然風景の美しさこそが主要な問題なのであり、それは著者自身この庭園を絵画的庭園 (*jardin picturesque*) と各所で呼んでいることから察知されるのである。

#### (5) 庭園及びその理念の近代的性格

アルファンが提案する非整形形式庭園、及びその理念が持っている近代的な性格はどこに求められるのだろうか。

まず第一にこの庭園が目指す自然風景は一種の理想境とも言えるものであるゆえ、造園という行為自身が内包する人工性、人為性は眼前にある自然を越えるという点にその特徴が求められる。18世紀イギリスにおいて風景式庭園が興隆したのち、19世紀前半を代表する造園家ラウドン (John Claudius Loudon, 1783-1843) がガーデンesk (*gardenesque*) と呼ばれる庭園の型を推奨するが、それは樹木を一本一本離して植える植栽デザインである。しかも彼は外国産の樹木を積極的に用いることにより自然風景とは差異のある庭園を作ろうとした。

これに対してアルファンの提案の意義は自然風景自体を洗練することにより差異を生み出した点にある。つまり自然風景を肯定的に評価した点は18世紀と通じるが、自然を詳細に観察して評価した上で、さらに洗練するという考えが異なるのである。自然の美を改めて問い直す意識こそがいたって新しい機軸であった。そして自然のイメージは自然自体におよばない<sup>12)</sup>と考えられていた19世紀の時代においてこの自然の乗り越え方の提示は画期的なものであったのである。

次に人間の視点、視覚を重視する点だが、これは庭園が造られる土地の条件を活かし、さらに設計が意図した効果を実際に検証することを目的としている。一つ一つその場で確かめるという実証主義的な面はこの時代の科学主義に対応した特徴なのであり、近代と呼応している側面なのである。

さて次にジャルダンを他の部分とは異なって扱う点だが、花を用い、外国産の樹木を積極的に導入する主張は彼の独自の展開なのではない。以前にレプトンが住居の周囲に花壇などを復活させているし、ラウドンはそこに外国産の樹木を導入する主張を展開している。ただコルベユやコルレットのような形状で花を植え込み、この区画を華やかにすることが目新しかったのかもしれない。

小建築物の活用の点だが、18世紀イギリスではケントが廃虚まで造ったが、ブラウンはあまり好まず、レプトンも基本的にはブラウンを踏襲している。この点から察すると実用性と適正配置、そしてその美しさを主張したことは新しい見解だったのであり、実用性を重視する理念に近代の科学主義との関連が見いだされるばかりでなく、庭園を使う側に立って考える意識に新しさがみられる。すなわち生身の人間を中心に据えた見方をしているのであり、この面が近代とつながっているのである。

以上のように3点に近代とつながる新しさを見ることができるのである。

#### 4. 庭園の近代的性格

最後に二つの様式の庭園の造り方を俯瞰し、その近代的性格を整理するなら、次の4点にまとめられる。

まず庭園の二つの様式に対するアルファンの基本的な考え方だが、いずれかを選択すべきだという両者を対等に評価する立場にある。すなわちその土地の起伏と広さから最大限の効果をあげられる方の様式を選択すべきだというのである。<sup>13)</sup> この合理的な見解は造園を建築から独立させて考える点と二つの様式を対等に扱っている点から成り立っているが、この点をふまえ、造園独自の内在的な特質を突き詰めていこうとする点がまずあげられるのである。

しかし、この二つの様式の中で共通して見受けられる傾向が存在する。それは自然らしさへの志向である。整

形式庭園においては自然樹形を重んじ、刈り込みに否定的な観点がそうであるし、非整形形式庭園においては既存の自然を乗り越えた自然らしさへの指向がそうである。しかも植物学の知識に裏付けられた自然らしさなのであり、ロマン主義的な傾向は感じられるにしても、当時の科学主義にのっとった傾向であったのである。

次に利用を中心として庭園のデザインを構成することがある。人間が歩く時に眺める景観構成のために、その時の視点や視覚を重視した上で全体の配置を考慮し、また細部にいたっては園路や階段にまず歩き安さを求めるのである。また、特に非整形形式庭園に用いられる小建築物は実際に使用するための実用性と実用の美を持つことを基調としているが、この点にも利用を重視する理念の反映が窺えられるのである。

最後に庭園の設計・施工における手法があげられる。それは「規則」という名の下で行なわれる構成手法の体系化であり、庭園のそれぞれの様式の長所をより活かす方法を普遍的に解説し、一般化しようとしたことである。人間の視覚から説明するこの思考形態はやはりこの時代の産物であると言えるのである。

以上の4点がアルファンの著書「プロムナードゥ・ドゥ・パリ」の記述から判明する造園の近代性である。さてこのような近代的庭園とは何だったのだろうか。それはどちらの様式においても共通することなのだが、生身の人間が利用することに重点をおいた庭園なのであり、あくまでもその構成原理を人間においた空間なのである。このように当時の造園の変革は単に公園緑地が体系的に建設されたことばかりにあるのではなく、造園界の認識が以上のように変化してきた点にも求められるのである。

**Summary :** Public Park planning was written into Paris' urban remodelling plan, executed in the middle of the 19th century. This plan exerted pressure on the existing landscape world to change. At the same time, the man responsible for the plan, Alphand, advocated a new garden, in short, the modern garden. What the plan involved, what was modern in these gardens and its characteristics were considered. As a result, 4 main characteristics came to light. The choice between formal and informal gardens made equally according to the area of land, the aim for naturalness, the garden composition with emphasis on actual use, and lastly the systematization of composition skills. These points outline the character of modern gardens of this period.

## 補 註

- 1) 佐々木邦博 (1988) : オスマンのパリ改造における緑地計画の理念及びその実態について : 造園雑誌 51(5)43-48
- 2) Adolphe Alphand (1867-73) : Promenades de Paris : J. Rothschild Éditeur
- 3) 佐々木邦博 (1991) : 「プロムナードゥ・ドゥ・パリ」におけるアルファンの公園観 : 造園雑誌54(5) 78-83
- 4) Adolphe Alphand (1867-73) : 前掲書 p.XXV
- 5) Dora Wiebenson (1978) : The picturesque garden in France : Princeton University Press. pp. 3-22
- 6) Adolphe Alphand (1867-73) : 前掲書 pp.IX-XXX
- 7) Adolphe Alphand (1867-73) : 前掲書 p.XXX VII
- 8) Adolphe Alphand (1867-73) : 前掲書 pp.XXX VII-XXXVIII
- 9) Adolphe Alphand (1867-73) : 前掲書 p.L
- 10) corbeille, 草花が植え込まれた円形、あるいは楕円形の植栽地。多くの場合、芝地におかれ、花の様々な色を混ぜ合わせた絨毯のように構成される。
- 11) colerette, 元来衣服の用語で、ギャザーのついたレースなどの衿飾り。庭園においては芝地と林の間に植えられる草花の細長い植え込みを指している。
- 12) Geoffrey & Susan Jellicoe, Patrick Goode, Michael Lancaster (1986) : The oxford companion to Gardens : p.211.
- 13) Adolphe Alphand (1867-73) : 前掲書 pp.XXX VIII-XLI